

合田強の『紅毛鑿言 卷二』の解題と翻刻

板野 俊文、田中 健二

香川大学

はじめに

本稿では、江戸中期の讃岐の医家であった合田強⁽¹⁾（一七二三―一七七三）の著した『紅毛鑿言 卷二』について述べる。これは強が宝暦十二年（一七六二）正月より同閏四月末まで長崎を訪れ、阿蘭陀大通詞である耕牛吉雄永章⁽²⁾（一七二四―一八〇〇）と、その弟の蘆風吉雄永純の成秀館で学んだ講義録であり、五巻からなるもののなかの第二巻である。この講義録をまとめて一巻として残された本が『紅毛医言』である^(3,4)。この中の『紅毛医言』⁽⁴⁾と『西洋医述 卷三』⁽⁵⁾『西洋医述 卷四』⁽⁶⁾『西洋医述 卷五』⁽⁷⁾『紅毛醫述 卷一』⁽⁸⁾に関しては、既に我々が報告した。重複を避けるため必要な説明以外はしない。先行論文を参考にされたい。

卷二の特徴は、三月一日から約一か月半の間に書かれたものである。約二十の病名を挙げ、その病因、病状、治術等について、書いている。

ことに、治術に関しては多くの薬物を紹介している。また、徐々に図が出てくるのも特徴の一である。そして、これが卷三になり、詳細な解剖図につながる⁽⁵⁾。

本論文の目的は、吉雄耕牛の医学的な知識がどれほどであったかを知ることであり、またそれを書き残した合田強の業績を顕彰することである。

凡例

- 一 この書は吉雄耕牛の講義録の五巻中の二巻（『紅毛鑿言 卷二』）である。
- 一 今回、翻刻したのは香川大学附属図書館医学部分館に所蔵されている複製本であり、これは、原本のコピーを製本したものである。
- 一 本文は漢字とカタカナで書かれているのでそのままの形で翻刻した。また見え消しは原文に従った。
- 一 本文中日本語の横に書かれているオランダ語の発音は本文のポイン

トより小さいポイントを用い、日本語の横に書いた。また説明の部分も同様にした。

一 翻刻中で、筆者の注は「」を用いて書いている。合田強の説明は、本文の横に少し小さいポイントで傍注にしている。

一 図は原文を元にして写図を作成した。

一 消すなどして解説不明な部分は■を用いて示した。判読不明な部分は□を用いて示した。

翻刻

(表紙)

此巻過半授春庵△

従 三月朔

シヤットカアメル。デルゲネイセン 此書
宝 倉 治方

午

八月九日於下山今城氏聞之

淳曰椿庵曰薬中甘草須用心用之也 此胡ノ湯之功在大黄乎

△治刺日 以水仙根為霜以乳汁和入眼中痛如失妙也 椿庵傳

紅毛醫言 卷二

(表紙裏)

薬品 ラバルベル 阿片 先生ニアリ
五 アンテモウニヤダヤホレデコム

目科

△或曰華陀術(8) 近于紅毛術也 陀者吳中之人 法近于紅毛

△親ノ存生ニタメタル財ヲ子カ暫時ニ使カ如シ 万事同之

△丹方ニ出発汗剂 生姜 葱白 以酒煮熱服発汗

○ マニヤ

○狂 脾臓 不順則亦為此病 是一説也 強按不是

○無熱不應于身自難義発也 強者無恥心或怒則分鐵無懼夜不眠或不食或不知寒或大食笑語高声啼語無定或静 皆曰心臓塞則為此病 心氣順則常也 不順則為此病也 或怒奔走雨中出走傷吾身 或頭痛胸痛

○治術 吐下為良 甚可吐又可下也

吐 其方ノ薬 能吐下ノ薬也 下シニ用ル時ハ三厘ヲ用レハ大ニ下ルモノ也 熱ヲサマス也 水銀ニ似タモノ也

メリクウリスハ水銀也 ヒ、タアハ拵物也

メリクウリスヒタア

白ブドウ酒ノ樽ノヲリ也 能ハ吐薬也 吐薬計ニ用 コロシイメタロアルト合テ作タモノ也 タルノエメテカ

山ヨリ出ル水銀ニ似タルモノ也 大毒アリ 吐下サスルモノ也

ヒツテルムアンテモウネ 製法アリ

軽粉梅瘡小瘡ニ用 小兒ノ虫ヲ下スニ二分ヨリ五分迄用 湿ヲ下シ毒ヲ解ス

アンテモウネ 黒キ石筆ニ似タルモノ也 銀山銅山ヨリ出ルモノ也 能癩癩大人頭瘡梅毒ニモ用ユ

此類ヲ一味ツ、用ユ

キザリイト 鼠屎也 瀉剂也 小兒ニ用ユ

ヘレポルアルビイ○ニゲリイ ホダレイ

コロセキンテタ コロシイ

メタロヲル
テユルペト
ミネラアル
此類ヲ用ユ

吐方

ヒツテリイアンテモン 十二ゲレイン
ヒツテリイキンヒユント
ヒニイレエナン 十六匁

チ

一卒倒 中風 卒ニ悶倒面色不変脈不絶無心氣呼吸不絶呼吸喘滿昏睡不知人

治術 髪ヲ外ヨリ持テキヒシク牽シメ鼻中ニ臭莢或ハ胡枏ナトヲ入

テ軒サスル時ハヨシ 尺沢ヨリ血ヲトリ肛門ヨリ薬ヲ突入ルナリ

肛門突薬方

淡婆姑葉 野菊花

蜜 ペレテレム ▲コロセイntenテス

○能利小便止吐血大腸ノネバリヲ治 噫氣
ニヨシ眩暈眠 アルニヨシ
ヘルバセリヒリユム
高サ二三寸 茎堅如木直立 地ヲハウハ
フタ所ヨリ根ヲオロス 白根也 葉青シテ
細葉対シテ生 開小紫花或白 アレ地ニ生
夏中アリ



急ニ耳後ニ 蚯蜻ヲ摺付ル
酢ヲ少入テ

即座ニ付テ水ヲトル也

肛門突薬ノ内

○ペレテレムノ能

高サ五六寸ヨリ尺二至尺 花野菊ニ似テ香アシ、花ノ心
ハ黄ナリ 廻リニ花ビラ付テアルナリ 花ヒラノ上ハ白
ク裏ハ紫也 実ハ細ク長ナリ 根細シテ五六寸根色落黄
ニシテ中ハ白シ 根計用ユル也

能ハ口中ノネバル者ハ根ヲカメバ治ス 口中ノ薬
也 齒痛咽腫凡口中咽頭ノ痛ニハ必用ユ 胃腸穢
物ヲ去ル

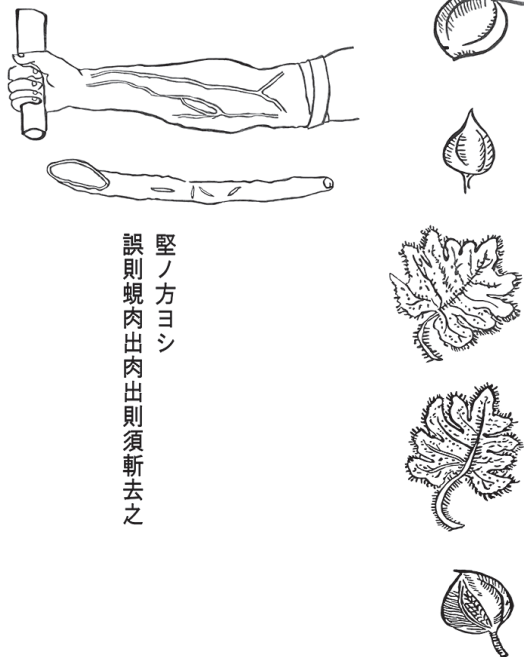
薬品集成曰味辛口中ニ火ヲ入ルカ如シ睡ノ根ト云 是ヲロ口ニ
入レハ睡カアツマル故ナリ 大ナルモノ小指ノ如シ 熱病ニ
ハ用ズ 身ノ冷タル人ニ用ユ 舌ノ痠シテ暗シタルニ用ル也
齒痛卒倒ノ突薬ニ用ユルナリ
コ、ニテハ寒熱ニハカ、ハラヌ也



肛門突薬ノ能

○コロセイntenテスノ能

実也
下スモノ也 胃大腸ノ穢物ヲ下ス 数年結タルヲ下ス
一匁ヨリ二匁五步位迄用ユ 実ヲ用ル也



堅ノ方ヨシ
誤則蛻肉出肉出則須斬去之

三月十一日 此書廿年前ノ明医所集甚可貴書也

内治書

傷寒并時疫 へエブリス 熱病也 又一名コヲルツ 時疫

リ

第一 始受外邪色青脉浮緊次大熱煩渴色赤脉絃數難治之病也 不可緩也△又以有自他病有 為熱病者此又難治也 治術可詳也

第二 不可緩也△又以有自他病有 為熱病者此又難治也 治術可詳也

第三 ○又有瘡一発而癒者又有 有間日或一日或二三日而発者此病

第四 治誤則又為難治 可慎也 ○湿病似傷寒不可誤治可分明也 是

湿中人則血不順 血不順熱生 熱生則似傷寒 譬如人誤小□肉 上 則忽然而発熱也

第一 △治術始宜解毒即発散也 可專退病也 傷寒他病之熱病瘧濕四者

一々宜分明也 可定 不然則誤治術誤者也 瘧者解毒而有効雖然 毎日 発者藥効難頭也 急可治不為緩

傷寒 一身大熱脈數呼吸短急者 自尺沢可取血

○大熱者 冷藥自肛門可吹突入也 藥汁寒温可適也

下方 用治大熱胃中燥呼吸短息脈數者 是 冷腸胃ノ間 之下藥也

ス、シウスルノ 呼吸短息脈數ヲ治

焰硝 五分 和無 タマリンデ 酸者也 四匁

草類 ホルセイナ 二匁 水四十八匁ヲ以テ煎シテ

右三味煎服 得下止後服

三月十三夜

肛門突薬

ホルデメンダアシイ 下シ薬 冷ナリ タマリンデ ホウリヤセイナ
ホルデハ大麦也

水百廿八匁ヲ以テ九十六匁ニ煎シ 是中へ蜜八匁焰硝一匁ヲ加へ 是ヲ肛 門へ突入ルナリ

○涼腸胃 下方

ホウリハ葉ト云事也 ホウリセイナ 二匁 タマリンデ 四匁
水 四十八匁 煎シテ用也

欲寛下則倍加 ホウリヤセイナヲ増シテ用也

○涼内薬方

大麦 ホルデメンダアシイ 八匁 蜜蠟 十二匁

酢八匁 水 百廿目ヲ入土器ニテ煎 熟シテ開クヲ度トス
プトウノ汁ニテ製スル酢ナリ 又ハ大麦ニテモ

○又方 主治同シ

パアニスビスコクシイ 世二匁 タマリンデ 十二匁
キリモヲリス。タルタリイ 四匁 水 百廿目ヲ以テ煮

土器ニテ煎スル也

又方

アゼトウザノ根 パアニス。ビスコクシイ 各十六匁

焰硝 一匁

水二百目入土器ニテ煮

右ノ方中ニ

○佛手柑ノ酢カイチゴノ汁カ砂糖少ヲ入テリンスハインノ酒ヲ加ヘ用ユ

下シタキ時ハ紅茨ノ花ヲ一握ヲ加煎服 熱ノ去マデ用ユル也 右ノ

方ハ熱ヲ去斗ニ用ユルナリ 熱去時ハ脉浮微ニナリ身勞スル時ハ温
藥ヲ以温ル也

温方散藥

ラアテキスコンタラエルバア サルアブセイテイ

青蒿ナラン

鹿角霜 各一匁

右三味散トナシ折々用ル 白湯ニテ用

又方

大麥ノ煮汁也

デツコリシイホルデイ六十四匁 ラアテキスコンタラエルバ 一匁

テリア、カ 二匁 アンテモウネテヤホレデコモ サラアブセンテリ

各一匁 砂糖 四匁

右時々サデ一ツニテスクウテ用ユ

又方

ラアテギス。ケンチャアアナ ラアテギスアングレイカ 各八匁

カルデベンネデシイ アフシンテイ 各一握

ブドウ

白薑蒲酒 二百四十目 右四味ヲ酒ニ浸シテ滓ヲ去 其酒ヲ用

○船中雜兵ノ者此病ヲヤム

一年モ二年モヲル故ヤム也

大都ノ山ノナキ処ノ者此病ヲヤムナリ 此
者ハ胃中ヨゴレテ其物ヨリ熱ガ生スルモノ也 凡シテ食シテ不_レ動ハ

病ヲコルモノ也 其後ハ食ヲ食フ事ヲ忘テ嘔吐スルニ至ル 又噫氣モ

出ル也 此病ニハ吐方ヲ用ル也

吐方 食滯ヲ吐スル方トミヘタリ

タルタリイエメテシイ ケレイン三 タマリンデ 四分

ヲ、リヨムメンタア

此メンタノ油ヲ以テ鍊藥トスル也

又吐方

インホシイーコロウシイ。メタロウルクム 八匁

右一味

又吐方

ラアテキス。ヘボカコアナ シコルフルー 白ブドウ酒 八匁

ヲ、リヨムメンタ

右三味メンタノ油ヲ以テネルトミヘタリ 此藥ヲ飲テ白湯ヲ随分_{ヌルユ}

ヨケイ飲ヘシ

三月十九日自作先生聞

ル 小兒積氣之藥方

驚風

大黃 サルハ塩ト云事也

サル——ポレイ。テレステイ 各五歩

ア、クワメンタ 霍香ノ水 廿四匁 マナニ匁

右三味ヲア、クワメンタノ水ニ入テ浸シテ上ズミヲ用ユル也

右少ツ、用 下シ藥ナリ 下タル時ハ一日二度用

此小兒ノツリハ腸胃中ノ病ヨリヲコル也 食滯ナドヨリ起ル也

故ニ乳母ヲ撰ヘキ也

◎ 又方 小兒ノ齒ノハヘル時ニ筋ノ引ツルニ用ユル薬也

ヲクリカンキリ 角石 琥珀 各一匁

白ブトウ酒ノ樽ノヨリ 五分 橙皮油
サルタルタアリイ

大サ ○ ホト

右散トシテ少用 用 紙ニヒロケテ用ユル也

ヲ 咳嗽
ウ、スト

咳ハ肺ヨリ起ル 肺ヨリ咽ニ通ル管ガアル也 薄キ皮アリテソレニ氣カ引カ、ル故ニシハムキヲナス也

シンケンキ

○内ニ熱ヲタクワヘテ咳ヲナス 熱ナキ時モ咳ヲナス也 熱ナクシテ痰ガ咽ニカ、ルト咳ヲナス也 是ハ胸膈ヲ和クル治術ヨキ也 ○風邪ヨリ起ル咳アリ 呼吸ニツレテ咳ス 老人ハトカク治ニクキモノ也
△シンケンキ

此病ヲシンケンキト云也
沈ト云事

○始頭痛カラ鼻齒胸痛ム 中寒ノ証トミヘルナリ 夫ヨリ咳ニナル事アリ 涙ガ出タリ鼻汁カ出ルモノ也 弱キ人小兒極老ノ人ニ此病アリ 其起ハ冷ル処ヘ出テ俄ニ寒ニ中ルト此病ヲナス 多ハ冬起ル也 寒暖ノ氣ニ中ラレタル也 暖國ノ人寒國ヘ行ト此病ニナル 裏ニ人トシンケンキト云病ニナル此熱カ裏熱ニナル ○シンケンキト云フハ物ノ沈ムト云事也 咳カ有テ後ニ骨節ノ痛トナル也 ○是ヲ治スル方

テリア、カ 一匁 又方 皆發散ノ
此ハ二味用ユ 美人草花 蜜鍊ニシタル也 八匁

サフラン シコロブル 半分 アンテモウニイテヤホレテコム
シコロフル武ツ

右三味少ツ、温湯ニテ用

又方 發散ノ薬ナリ

ラブミブシイ 八匁 タヅノ実ノ熟シタルヲ白ニテツキ汁ヲシボリテ砂糖

右二味鍊合テ膏トナス也 サフラン シコロフル 半分

ラウダアニイ。リキウデ 匁不知

右用テ發散サスルモノ也

○風邪之時マハリシンケンキノ治ノ通也 發散ノ劑ヲ用レハ皮中ノ邪サル又方 風邪ノ咳ノアル時ニ用ル也

テリア、カ 一匁 アンテモウネムテヤホレテコム シコロフル一
サフラン シコロフル半 ステイラシス ケレン五

接

右四味散交シテ用 晩方ニ用也 ブドウ酒ニ交テ服也

○熱カアリテ咽中燥キ咳スルアリ 此時ハ熱病中ノ解熱ノ劑ヲ用
○肺ニ腫物カ出キテ咳ヲナスアリ 是ハ痰血ガ交リテ出也 肺ガ破レテ血カ出也 ○熱ガアルモノ也

方 治咳血

ハルサムコツパイハ 四匁 バルサムベルヒヤニイ 五歩
スパルマセイチイ シコロフル二 ステイラシス シコロフル一
ラアデキス。ゲレイ。セリイサ 見合
根

右 丸シテケレイン四ホド一丸ニシテ一度ニ用時々用
右咳血ノ病 壯年ノ人口中甘キ者ハ尺沢ヨリ血ヲトルヨキ也

ワ 三月十五日夜於吉雄先生宅聞之

◎腸胃ノ間有毒者可下也 多食飲而穀不化是強不可下也 若不吐不下

腹滿者有可開之

○若腸胃間有熱 有熱則生毒可下其毒也 其方左ニ記ス

下シ方

ホルセンナ 二匁 タマリンデ 四匁 セイメンカルウイ 一匁

サルカタルテカアンゼリカ 一匁五分 水三十二匁ヲ以テ煮

一度ニ温メル也 用ユル時ハ大便ユルヤカニ下ル 其多少ニ仍テホ

ルセイナヲ増シタリ減シタリスル也 此薬ヲ用テ熱引タル知ル 未

タ熱残タル時ニハ不圖血ヲ吐事アリ

其時ニ用ユル

没薬 一匁 蘆會 五匁 ラアデキスコンタラエルハ 一匁

菌陳ノ塩也

サラアプセシテ 一匁

右散トシテ一日二三度用

熱ヲサル薬也

又方

龍膽平

ラアデキスゲンチアナ ラアデキスハ根ト云事也

根

カルデベネデキシ アブセンテイ 各一握

菌陳草

板野 俊文、田中 健二——合田強の『紅毛醫言 卷二』の解題と翻刻

コルデアウラントウルム サルカアタラ。アンゼリカ 各四匁
橙皮乎

白ブドウ酒カ又ハビイルカ三十六匁 水十八匁交ル

右ノ六味ヲ此中ニ浸テ一日ニ四度用ル也

右之分ニテ熱病ハ多ハ治スルモノ也

カ ○○宿食

△面色青而黄ニナル 惡寒發熱モアル也 本ハ食物ヲナマ嚙テ穀化セ

強人ニ必アルナリ

ズシテ胃中ニ入レハ腸胃ガ腫ルナリ 腸胃ニ絡テアル膈膜ガ變スル

也 サスレバ血ガ變スル也 故ニ息ツカイモアシクナル也 面モ色

アシクナリ一身モ黄ニナル也○人ノ色カハリテ一二通アリ 食化セ

ズシテ如此アルアリ 又食ヨリ化シ腐リ腸胃中ニヒバリ付テ如ク黄

ヲナスアリ 又消化セズシテ 又腐リテ此黄ヲ発スルハ猶六ヶ敷

腸胃中ニ腐リヘタバリ付テ此病ヲナスハ手足ガカナハヌモノ也 ヒ

マドリタル程難治トナルナリ 此病ハ食物ニヨリテ皆生スルモノナ

リ 小兒ノ食ノアタリヤスキト同シ事也○治術ハ吐下ノ劑ヨキモノ

ナリ 面ニ黄ヲ発スルハ血通カ滯タルモノユヘ吐下計ニテハ難治モ

ノ也 腸胃ハ食ヲ化シテ下ス役ノ臟府ナリ 化セザルハ役目カ違タ

ルモノナリ 是ヲ治スルハ吐下ナリ 故ニ始ニ吐下ヲ用ユルナリ

吐下ヲ用タル後ハ食養生第一ナリ 食不謹時ハ又本ニ反ルナリ 後

ノ薬ハ胃中ヲ健ニスル事第一ナリ

方 胃中ヲ健ニスル方ナリ

蘆會 五分 没薬 一匁 ラアデキスセドアイイニ匁

ミリンカノ根也

根

ヲ、リメンタ 一分 アブセンタ 三分三厘
菌陳ノ□ アクニ煮テネリツメルト塩ガ出来ル也

右散トナシ一日三度用ユ
又 右ノアトニテ用ユル也

ラアデキスインペラトヨリヤ 八匁 ラアデキスガリヨヘラタア 八匁

ラアデキスカランガミノル 四匁 霍香ナリ
ヘルバメンタ
ヘルバハ草ト云事

ヘルバセンタウロミノル 各一握 蘆會 一匁

サルカタルテアンゼリカ 三匁

右 薬酒 一升 水一升入テ煮テ一日三度用ユ

丸薬

没薬 一匁 玉乳香 シカモウニヤ 三分 霍香ノ油 五分

サボン サボンノ事
ヘネチハ國ノ名也 サボウネス。ヘネチ 二匁

右丸トナシ 四粒ツ、三度用ユ

右ノ薬ヲ用テ小便黄ニ通スルハ病治スル也 若小便白クシテニゴリア
ルハ治シニクキナリ

○次○口中ノクサル○黄疸○色ノ黒クナル病アリ

三月十五日夜於先生宅聞之譯

◎中風 パラレイシス 一名ランミキヘイテ

手ヲ引ツケルアリ フルウモアリ 此病筋骨カ枯タルモノ也 因ハ精
力ガ盡タルユヘニ此病ヲ生ズル也 上ニ引筋カユルマリテシモウモノ
ナリ ○若水銀ヲ服シタル人フト此如クナル事アリ 又金山銀山ノ

氣ニウタレタルモノ此病ヲナスアリ

○頭ノ百會ニ氣血ガ上リツメテ此病ヲナスアリ

○牽ツルハ類カ多シテ治スル事モアル也○段々類カ多アル也

○夏 夜氣ニアタリテコノ病ヲナスアリ○戸ノスキ間ノ風ニ中リテ此

病ヲナスアリ○薬ヲ用ルニモ所々ニテ治モ違ト知ヘシ

●其中ニ精力ノ盡テナルアリ 氣血カ急ニメグリガトマルト直ニ死ス
ルアリ 是今ノ卒中ナラン 肺ニカ、ツタ病ハ息カ短ナルナリ

治方 始ニ筋ヲユルメル 第二ニ筋ヲ引薬ヲ用ユル也 第三動カス薬ナ
リ 第四ニハ四方ニハツノト

引油ハ黒ツ、ノ油 テレメンテイノ油

筋ヲノベルモノ也 コヘ松ヲワリテソレヲ煎シテ油ヲトルナリ

サルアルモノニヤシイ

開ク能

バルサムペルヒヤアノム

右ノ油ヲツケテ一日ニ二三度手足ノツガイクヲモミ捻ルモノナリ 此術

ハ中風ヲヤミテ死シタル人ヲトイテ見テ知事ナリ○手カナヘテ捻ラレヌ

カタノ

時ハ膏骨ノ穴ヲ捻ナヅル也 足ハ腰眼ノアタリヲ捻ルガヨキ也

○至テ暑ノツヨキニ傷レテ此病ヲナス 又酒或ハ焼酒ナト強キ酒ヲノム

人ハ精氣ガハツト散ユヘニ此病ヲナスナリ○又寒ニ傷レテナユルアリ

空天井ノ所ニネルト血氣ガ凝テ此病ヲナスナリ○不自由ナル所ヨリ此病

ヲナス事アリ 此ナヘタルモノハ急ニハ死セサルモノナリ

○治術ハ上ニ云タル四味ノ薬ガ殊ノ外功アルモノ也

在前記之

(註 半丁白紙)

三月十六日自作先生聞

△○水腫 人ノ強弱ヲ見テ強人ハ始ニ吐方ヲ用 次ニ下ス方ヲ用 下シ

テ後利水ノ劑ヲ用ユル也

在 此下也 スルドナル故ニ 酒樽ノヲリ也
下方 サルタルタアリイ 三分三厘

硝磺主分 コムガルゴアニイ 一匁

シアモウニイ 五分 レイシイナカラツパア 五分

ヲ、リヨムヤルベイ

右五味 丸トナシ用 一日三度用 用ヤウ時ニ隨ヘシ

ユルヤカナル下シ也
下方

一方 ○サルタルタリイ 二匁

○ラアデキスアゲリイカ ○ラアテキスカリヨホラタ 各八匁

○ヘルバメンタ 二握 ○ホホリヤセイナ 四匁

右白ブトウ酒ニ浸シテ用ユルナリ 此アト利水ノ劑也

時ニヨリテ桂ヲ用ユル也 ヨリ水通スル時ハホウリヤセイナヲ去テ此薬ニテ治スル也

○虫

蘆會 一匁 没薬 一匁 菌陳ノ如キ甚苦キ物ヨシ 二匁

セイメンセドアリイ 二匁

右四味 散トシテ用 又煎湯トシテ用 湯ノトキハ 陳一味煎

○動脈ノ筋ハ心ヨリ出筋中ニ血カアルナリ○又一ツ血ノアル筋ハ肝ヨリ

板野 俊文、田中 健二——合田強の『紅毛醫言 卷二』の解題と翻刻

出ルトミヘタリ 氣ノ筋ハ肺ヨリ出ルカ 積氣也 驚風云類ナラン ストイフ
トイフハツル事也 テラ■ツキン ス

未詳

三月十四日吉雄先生授之

○始筋ヲツリツケル腸胃共ニツリ上テ身自由ナラズ

○物ヲ按シツメテフツト打倒ス事アリ氣ガフサガリテ打倒事ナラン 此

病何カラ起ヤラ万病ヨリ起ル物故定カタシ○此病セイ氣ヲ内ヘ打コム故

ニ此病ヲナス 此病多ハ死病ニハアラス○血ノ分カ頭中ヘ皆上リツメル

也 譬ハ産後血量ニ似タル也○身中ニ血ノ筋ト氣ノ筋トニツアリ 氣ノ

筋中ニハ空虚ニシテ物ナシ 若誤テ此筋ヘ血ガ入ルトメグリガ塞テ此病

ヲナスナリ

○人ノ強弱ニヨラズ皆強ク発スル病ナリ 氣カ頭上ニ上リ多ハ女ニアル

ナリ 女ハ生付ガヨハキ故ナリ 一度ズツト上ル病ナリ 胸ニセマリテ

息モツカレヌ病ナリ 強按 是ハ積氣ナリ 是積氣ニシテ筋ノ病ナリ

○一人女アリ 此病ヲナス 皆云癰瘤ト云 不然 是筋ノナス病ナリ

○此病薬ヲ誤テ用ユヘカラス 氣ヲ通スル薬計ヲ當時用ユヘシ

醉ナトニテ氣ヲ開クヘシ 只氣ヲ開ク事随一ナリ

□積氣治方

ア、クワ。メリサ 四十八匁 スヒ。ロウズマリニイ 二匁

シユクシニイ 琥也 シコロフルニ 六歩 サルフラアト。ヲリヨズム

二十五テキ ラウ。リクイダ 十五テキ セイロウプパソアフル 四匁

ケシ白花ノ蜜ツケ也

右

ベステス

□△疫

此病コラルツノ中ニ入ル也

此病ウツル 熱ガ悪症デ人ニウツル也 後ハ至極大熱ニナル也 一家一門ニテモ此時ニ来レハウツル 難治ノ病ナリ

治術 発汗第一也

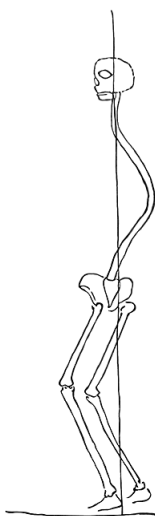
方

テラセチラアタナラン 没薬 アンテモウニイテヤホレテコム
テラシキクラアタ コンタラエルハ

突葉筒



龜背 早不治則不治若知之則早可治以銅作如衣胴器可着
骨不長



咳嗽

三月廿五日

○小兒食而胃中不化 腐而為痰為咳。食傷吐瀉之後為咳
和之方

方

ア、クワメンタ 四十八匁 蘆會也 アロエ、ス 五歩 没薬

サルタルタリイ ラアテキスガランガア 三井ノヲ 細末 三味各
シコロフル二

為散 十錢匙 一日一サジツ、三四度 小兒ニハ加砂糖 一

若大人ナレハ丸方ヲ用

丸方

サボウネス。ヘネイシイ巻匁五歩 バルサム。ペルヒヤノム

蘆會 アロエス二味 各シコロフル一 没薬 一匁 サルサルタアライシコ

ロフル 一

ラアテキスガランガミイノ 見合 フ、リヨムハ油也
ヲ、リヨムメンタ見合

右 為丸 一丸ノ重ケレイン四計也 橘皮末為衣

廿七日夜

○疸瘰 水腫 吐血 熱 頭痛 小便閉 吐逆 不食 膈 濟 濟

三月廿七日

癩 腐ルト云事 ベデル。ヒンギ 瘵 一名 シキウルバイカト曰病ナラン

○悪寒シテムネセマリ食スレハ即吐ス 起リハ大熱ヨリ起ル也

○悪食ヲシテ一身ノ血カ腐モノアリ 津液■カ皆腐ル 物身ノメグル

血ガ皆腐ルナリ 大熱毒ノ病也 大腸ヨリ起ル病ナリ 或ハ悪キ氣
候ニ傷ラレテ此病ヲナス也 熱国ニ多キ病也 野菜ニテモアシキモ

ノ煮サル物ナトヲ喰スレハ必此病ヲ起ス也 二通アリ 一ハ熱シテ
悪寒アル也 一ハ只寒テアル 悪寒 時疫ノ如クハヤル病也 国ノ

熱シテ湿ノアル処ニハヤル病也 夏此病ヲナス物多シ熱ガアル

○息カ臭ク口中ガ苦ク青イ物ノ水ヲ吐スル也 齒グキ舌トモ腐ルナリ

後ハツメタキ汗ガ出也 四支厥冷シテ震フ病也 吐スルハ黒キモノ

ヲ吐也 死症ナリ 煩燥シテ引ツリテ死スルモノ也

治術 始 汗下ヲナシ 又自尺沢取血 汗シテモヨシ 下シテモヨシ

涼処ニヲケバ氣ガメグリテ自ラ解スル也 熱処ニアリテハ病イヨ

増也

○此病ト知タラバ早ク下スヘシ 冷性ナ物ヲ用ユヘシ

○治術 野菜或ハホウレンソウノ類ヲ食スルガヨシ 油類アシ、

用方 香氣ノアルヨシ 根ト云事 和名スイカンボウ敷 赤キ茨ノ花 半握 ラアテキスアハゼトウザ 八匁 香ナキハ不用

ホルデメンダアシイ 十二匁 水百六十目入 麦ノ開ガ度也

大麦也 其儘用ユ

佛手柑膏カ イチゴノ膏カラ交ル也 熱強キ者ニハ焰硝ヲ加フ

西天竺ニテハ下シテトル也

国々ニテ治術違ナリ

ヲツビス。トツヒンギ。ハンデヒス

△小便閉

小便不通ハ膀胱ニカ、レトモ腎ヨリ起ル也 腎経ガ痛メハ水通ニ中

分ガ出来ル故起ハ腎ニカ、ルト知ヘシ 膀胱ノ病ナレドモ本ハ腎

ヨリ起也 又精中ノ塩ガ凝テ如此石淋トナル也 コレ故小便不利

アリ

治術 ラアテキス。アングリイカ 八匁 バカ。ユニフリイ 八匁

セイメン。レヘステシイ セイメン。フニケレイ 各八匁

白ブドウ酒ヲ二百十匁 右四味ヲ入温メテヨビ出■ハ 其中へ琥

板野 俊文、田中 健二——合田強の『紅毛醫言 卷二』の解題と翻刻

油ヲ一滴入テ一度ニ用 腰ノ痛ニヨシ

治方 色々アリ 此アトハ外治ノ術アリ 外治ハ陽中ヲ切ル事ア

リ 膀胱モキルナリ

ゲエル。シユクト

△黄疸

○食小胃キウケテ小腸キヲタル 胃ト腸トノ間ノ病ナリ

○始ハ膽ニ病デキテ膽汁カ漏テ胃中ニ入 ソレヨリ小腸ニヲクル 腸胃

ノ間ノ病也 始ハ一身ノ色黄色ナリ 後膽カ腐時ハ黒クナル 是惡症也

目モ黄ニナリ小便モ黄ニナル 其中ニ紙ナトヲ付テミレハ其紙黄ニ染ル

ナリ

○治術 膽汁ノ出ル所ヲトムル治ヨキ也

治方

ゴム。カルバアニイ 脂類無日本 サボウネス。ヘネヘシイ 各二匁

サルタルタアリイ 五歩 大麦 一匁 エレキシル。プロプリ。タア

テス 見合

右丸重サ ケレイシ四ヲ一丸トス 一日三四度一丸ツ、用ユ

食養生 油氣ヲ忌

此アトガツリケニ成 吐ヲナシ或ハ熱ヲナス

四月二日

クルリト反リ違フ

フルケエルデ。エ、テルス 翻胃

膈噎嘔吐

食好雖食之食入則吐 又食則又吐 或不好食而有吐者 譬如牛食飼

也○若大食則其食滯而為此病

○腹中解見之 則不可名物也

○心胸中痛 又腹痛 又下利惡物其氣臭酸 如此者難治也 有為吐又

下者小兒有此症者惡症也 是腸胃弱故為之 小兒腹滿者可下之 兒

食不謹為此病也

治術 是甚易察病也○飲食及向飯供食則不能食又食則吐 或常如飽不欲

食又飢故

治方

エレキストル。プロプリ。パラセイ 二匁 サルタルタアライ 一匁

メアラ 六歩六厘 主分主厘 ガランガ。ミノル 六歩六厘 水也 ア、クワメンタ 卅二匁

右為末サジニテ一スクイ宛用ユ 一日四度用之 若不下者加大黃蜜

用此散藥而後 若不治者

沒藥 一匁 シカモウニヤ 一分六厘 サルタルタアライ 五分

角石 一錢目 ガランガミノル 一匁 油也 ヲ、リヨムメンタ 一厘六毛六沸

右為散 用一日三四度用之

右二方者 小兒之治術也 計兒之大小用之

婦人不嫁者経閉則色青食則吐 諸藥不効用上方而平癒後 自然行○又婦

人経閉而後三四月之間 為吐者必妊娠也

○ソウダ 強按 嘈雜歎

此病始心臟動如灼 為惡心 或噫氣癸或咽中如吐火 此病人口中苦

○ブラアカ 嘔吐

胃中不修故為吐 皆腸胃動故為吐 又胃弱人為吐每々有此病

治方 用吐方 後以下藥下之 其后健腸胃之藥可用

○フルロラレン。エ、テレスト 痞滿 不食

胃中痰沫滿則為此病 不思食而 噫氣出又不好食○此病自肝膽生

治方 治胃中鬱滯 不食

カルデイ。ベネデキシ アブセンチ 各二握

ロエ アルベス サルタルタアライ 各二錢目

蘆會

エツトウエン 二百四十目 右四味入酒中浸去滓此酒ヲ 燒酒ナリ

一日三度用 用之則下利 此時減蘆會

又方

エレキス。プロプル。パラアセス 四錢目 リコウリスタルタアライ

一錢目 ヲ、リヨムメンタ ケレイン 五ハリ 三毛三拂

ブルウト。ブラアカ

○吐血

胃中ヨリ血カデル也 多少アル也 吐血ノ色ハ黒色也 食物ナトニ傷ラ

レテ血カ出也 沫不出○吐血ニ段々アリ○又吐藥ヲ用テ胃胸ヲ破テ此病

ヲナスアリ

治方

以山羊乳汁和レ水用 咽痛止 又牛乳汁為佳 他藥慢不可用○又用ニ

ヤギ

ケシノ蜜ヲ一

又方

大麦ノ煮汁 赤茨ノ花 サルプルネル

焰硫合

白ケシノ蜜漬

右合用之

四月四日 ヘイドロピイクス 一名ワアテルシユクテキ

△△水腫 水腫ノ水ノ取様 不可 不慎 先定其所可採 若水急通則

病不徐 若刺処不吉 則其人難治也 先水急腫而 二便無棄時 可

用此法也 老人小兒雖然難用此術 只大人耳採水可也 老若必不可

難用

取 自臍中可取之 臍下三指計之処可取之 腹部有筋 此筋ノ上不

出

可刺 白筋ハ腸胃膀胱ニ通故ニ不可刺 斜ニ可刺 其針金銀鉛ノ

ナナメニ

ナマリ

類ノクダヲ可指

新書ニ曰 昔水腫ノ病人アリ 我死ヘシトテ自ラ腹ヲ斬ニ水出テ病癒

ソレヨリシテ水ヲトル事ヲナス 其術久シクスタリテアリシニ今考ルニ

腸胃ニ水タマリテ腸胃腐タルハ必死ナリ 早クシテ不腐者ハ治スルモア

ルヘシ 不考故ニケガ、アル也 水ヲ取時ハ脇ハラヘ指ハツヲキテ横ニ

斜ニ針ヲサスヘシ 水ヲトリテ後病人悪心ス 是必死ナリ 水掛目二百

目ヨリ五六百目トル也 針ヲ抜テアトハ膏藥ニテ癒ナリ

○取足血 以白湯浸足則筋見

能下絳水 治足小瘡 頭痛眼痛

ジンジイベル

○生姜

此物無紅毛 故用乾生姜 或又蜜漬姜漚

其味胡榘ニ似タリ 根指許色黄 香氣甚 功味トモ似

莖蒲乾生姜味殊甚大温 寒中歩而有骨節痛者用之 開寒

鬱 温 胃中之冷 一切胃中之痰 故每朝食ニ姜蜜漬 進 食和 木便

止難 大便 止 大便易 通 強 勢ヲ強 明 目 拂 疫 常菜食テ進 食

清ニス

為

姜汁合酢服 寢則発汗 腸縮痛腹痛除 腸ニ有 風小茴香合 姜用之

而

コメイニ

加

又以姜汁入糖治 感冒痰咳 中ニ寒氣 風邪疝必用之 緩 腹 蜜漬

方 生姜寒中浸 灰汁 五六日出シテ煮之 以 蜜煮漬 蜜ニ

オトクヤメンタ

○霍香 止吐 ○胃府子宮ノ病ニヨシ 吐ニヨシ 或噫氣ニヨシ 腸通

ニヨシ 頭鳴頭痛白帶下ニヨシ 虫ヲ殺

○鹿角 発汗解毒 有熱病門中

コルネセルヒイ

○大黃 葉大也 根大小種類多シ 中ノ腐リテ軽キ物 色黄ニシテ舌ニ

ラバルベル

舌ヲシメルヲ上トス 甚黄ヲヨシトス 黒ハ下品也 自唐来者効緩

ナメテ粘アルヲ良トス ○至極上ハ舌ツ唇ニツケテヨク付ヲ上トス

テルクヨリ出ル者上品ヨク下ル也

能○噫氣又心中懊懣欲吐 又骨節牽攣 又肝脾之病 又腹中痛 又腎膀

胱病 又胸膈病 又呼吸短息 又吐血 又吃逆 又痢泄瀉 又諸毒虫

獸咬 又自高墜筋不伸 又腹中鬱不開者 大黃開之也 ○唐黄ハ人不

用惟畜病耳用 胃大腸小腸之病必用之 一切下集之藥為之使 又臈病

必用之〇一目小腹至腋下痛者用之

カルダモウミイ
縮砂

水ノコト

ア、クワメンタ葉共茎用

〇霍香

田村玄雄曰

動ニ脉中之鬱ヲ 有胃中有粘痰 有治吃逆 治為吐 治為
悪心為噫氣頭痛頭鳴止大腸之痛凡

ア、クワノ能 浸綿温病上 又以烧酎浸取汁 又取塩取油
其能出方書

カルテヤアカ

〇益母草 鬱ヲ開 虫ヲ殺 通小水

ヒイコス

〇無花果

実ヲ乾テ用

ドウガキ

常ニツカフ也 肺癰肺痿ニ用ユ 或石淋腰痛大便ヲ和ク
腸痛ヲ和 故ニ肛門ノ突葉ニ用 痔痛ニ煎シテ洗ヘシ 小
児ニ喰ヘカラス 多食レハ患走子疳

此実白汁ヲイボニ付ルトイボカ落也 白汁ヲ齒ノ痛ニ付テ齒痛ヲ止

十二日先生傳

△阿蘭陀酒之方 一合搗花水一合二友 橙汁交水加沙糖少入肉豆寇 一分 即服之
止渴潤腸胃 紅毛人常飲之

〇大茴香 唐人之多使也 唐人煮為茶代服之 紅毛國未用也

〇鵝屎 乾者一錢目 服治黄疸

三月八日

アルケンギイ一名酸漿草

〇燈籠草 主治腎膀胱ノ痛 能通小便石淋 小便淋瀝又淋病 淋病腰痛

右 実ヲ用ユ

リクリチャ一名ラアテキスドリンス

〇甘草ラアテキス 主治者不出咳 出痰 咽喉痛 喘息開肺鬱 專治肺

病 或吐ニ血痰ニ 凡咽喉痛皆佳也 凡有熱者合藥必用之内有瘡者 腎

有瘡者必用 強按 是解人臟見之故知之 膀胱者有瘡 又用淋病 又一

身血味鹹辛者 病則必用之 止内外之痛 止渴治久咳 胃中燥肝病亦用

止渴 冷熱胸中病 肺癰腰痛病 又目中出淚入甘草汁〇生甘草擣潰燒酒

治口中為病也

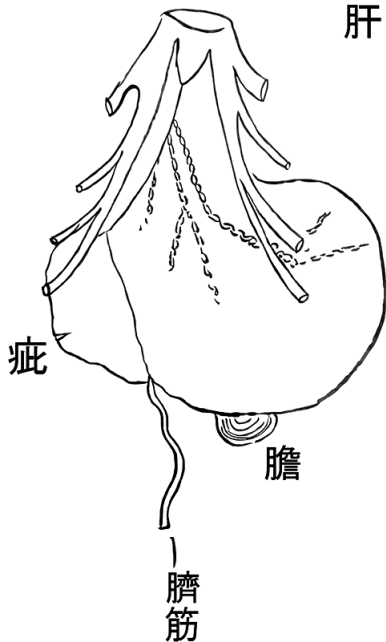
〇瞿麥 即石竹也 主治傳染于人時疫防邪者也 根汁治石淋下石 此草

有野生為佳 又汁治癩癰〇筋之病必用 攣筋眩暈卒中風癩癰〇花漬蜜解

諸毒 毒虫又殺虫解熱 又治胸中惡心 又吃逆又治嘔吐 或口中齒不堅

水煮而湿口 或墜胎 又安産〇浸油治狂犬病 治筋痛

肝



草目耳渡日本 金石鳥虫之類未來

アリサアルム

○半夏 葉ツタノ葉ニ似テ葉先キ尖リ茎細長ク由跛ノ葉ノ短キ也 茎中

空ナリ 花ノ内ハ黒紫色 中ヨリブドウノ如実出テ後ハ赤クナル也 根白シ 根ハ由跛ニ似テ小キモノ也

○能ハ天南生ニ似タルモノ也 外治ニ使フモノ也 此根ヲ陰茎ノ上ニヲケバ腐ル、モノ也 天南星ヨリ効ツヨキモノ也○根ヲ製シテ白粉ニツカウモノ也

ア、リム
ホトトギス

○天南星 咳ニ用ユ 胸中ノ涎沫ヲ快ク吐スルモノ也 咳嗽○

又カルフス。フウト

常ノ食物ニモスル也 胸中ヨリ肺ニ集タ痰ヲヨク切

也 此根ヲ細末シテ山羊ノ乳ニテネリ煮用ル時ハ痰ヲヨク切 胸中腸胃ノ痰ヲヨクキル也 此汁ヲ目ニ入レハ上瞽ヲトル也●痔ニ用。葉ハ金瘡ヲ治ス 根ハ火傷ニモヨシ 故ニ白粉ニ入ル○葉ニモ用ル也

能ハ二物同シキ也 温ニシテ乾カスモノ也○此根ニ芩沙糖三匁ヲ合シテ喘息ノ痰ヲキルナリ 只痰ヲヨク切ル葉也

○由跛 スベヘルヲトル
天南星 一躰ノ湿ヲヌクモノ也

スツタラモウニヤ

○莫宥 能眠ス也 性冷和痛為吐後必眠 仁兩目四ケレイ

ドラルンアツブル

以酒服解 二匁用則即死于毒 欲解毒 可用吐法

吐法牛乳以酒服 眠即吐愈 吐盡毒而愈後 手足以熱湯浸 ○葉ケシノ葉ノ香アリ 仁ヲ燒食 即笑乱心ス

花葉多葉姑ニ似タリ ○強按ツタウルシト云

アコリス

○石菖蒲 治諸腹痛 去胃中之穢水胃中冷痛 能同生姜 無萎時易用

治小便數瀉 或快利小便 治胸中ノ病 腹中雷鳴 金瘡斬藏者 或脾藏腫 殺虫蛇毒○寒中肺鬱滯 用之解 或開胸鬱

浸蜜用之

水仙 金瘡乾スレ之 使翻胃中為味者○治火傷金瘡筋切搏之則續○合蜜

搏打撲妙也 摺根搏食咬牙即出

○白葡萄酒 ヒニイカリシイ 本名也 又一名 ヒニイアルビイ
ウエンステイント云 即ブドウ酒ノ桶ノヲリ也 性冷ナ

リ 大腸中之腸垢ヲユルメ下スモノ也 ソレ故ニ下藥ニ用ユ 別シテ腫氣ニヨシ 胸中短氣 三日間日ノ瘡ニ用ユ 五分ヨリ三匁マデ用ル也

○胡枏

ヘルスト
○ヒイラギ 咳ヲトメ脇腹痛ヲ治 葉ヲ煮テ用

○大根草 ソウ

夏枯葉

○蕁麻

アギリモウニヤ 冬枯也

○狼牙 春路側ニ生ス 花黄ニシテ下ヨリ漸々ニ咲也 葉鋸アリ

ダイコン草

根黄 主治 胃ノ府弱キ者ニハ必用 胃肝脾ノ弱ニ必用ユ 胸中ノ痛ニハ必用ヘシ 咳嗽肺ノ痛 肺癰ニモ便血遺精白帶下金瘡ノ内藥ニハ必是ヲ入ル○葉ヲ用ユルナリ

三月六日

○勺藥 ラアテキスビヨウニイ 為下利 和腹中拘急止婦人經水 或加于癩痢藥中 痢症甚為良藥使 小兒驚風癩症者 連勺藥於糸掛首 或產前產後用之

八日

○ヲクリカンキリ ヲコリイカンケリイ 川海老之胃中之石也 不煮物色青 煮則白色 青物為上品也 有大小 依海老大小也 又自口吐之能有上卷可考

上卷可考

○蛭蜻 カンタアライデス 徹之為水疱水出病解 或外潰燒酒 淋家飲之 若誤用之 為便血可畏也

○菱実 ヒシ 通藥也 下レ石

○テリア、カ 不授

○惹茨仁 治腰痛 清膀胱中 又治石淋

○ナラ檜ノ雲ノ足 ボレボウデム 白キハ有香氣 可用黑者 不堪藥用 ○主治利水 煮服五分 通小便 下死胎

○番木鱈子 カラアンヲ、ゴマチン 外少有毛 內堅如押 若誤用二錢目 則人亦吐而即死 凡諸獸不開目生者用之則死 ○有

○肉桂 シナモウメム 桂者薄皮也 去粗皮 用長尺許皮卷如管可飲水也 此皮色黃赤 而味辛辣含甘味 香遠聞 多自天竺來又自西論來 大木

葉如佛手柑 四時不凋 生而三四年者採皮 用年中採皮

皮肉之内見有 潤而採之為時

○主治強胃 強子宮 健腹中 甚人有利 卒倒 心悸 胃中痛 心氣不和 子宮痛 妊婦虛弱者為產時必用之 通經水 下胞衣易產 產前後必用之 產後血暈用之 凡早卒為氣絕用之 此病皆自胃起 故 呼吸喘滿也

三月六日

○紅毛石竹 ギノフル 本一根ニシテ花葉トモ常ノ石竹ヨリ色厚シ 前撰香可考合 根ヲ煎メ含ハ咽喉ノ腫痛ヲ止ム 齒ノ浮タルニモ含テヨシ 野ニアル石竹ハ

凡頭中塞為病眩冒可レ用レ花又筋病

○麻黃 バアルデスタアルト 止吐血便血 治喘咳 能利小便 治大腸中發瘡 或腰痛 又腎膀胱病必用 或喘用根 婦人久下血用麻黃 癩時採為菜食

○ゴロヲトサクトライン 強圖ヲミレハ 花葉ヒルガホニ能似 本草曰漫又草也 長一丈許 大木ニ上ル 夏花ク 花白シ 折レハ白乳汁ノ如キモノ出ル 味苦

○問荊 ズギナ 土筆 治下血 止下利 水煎服 又止鼻血 磨象牙鼈甲之類

○サルブリルラ 能ゴロヲトサクトウ井ント同シ 消諸毒 中ニ毒藥ニ者必用 發汗 治ニ久頭瘡 或梅毒 寒濕用之則發汗而治

○焰硝 三月 日 主治甚解大熱 凡用諸熱病 又順レ血 殊解表症之發熱 金瘡有熱者用之 治ニ熱血 酒後大熱者一味用之 醉燒酒者用之

○焰硝其色白 其形似水晶 味少苦 濇土中掘出之 畜羊跡肥土 生之古壁生之

○輕粉 メリクウリユスドルシス 主治梅瘡小瘡 下小兒蟲 自一分至五分迄用 下_レ濕 解_レ毒

○へレボルアルビイ キョリイ

大ニシテスコヤカナル根也 白根ノ下ルモノ也 外黄色ニシテ内白ク極メテ苦ク能殊之外吐下サスルモノ也 夫故狂症ニ用ユ
へレボルニゲレイハ根黒シ 内ハ白シ 味苦辛 脾ノ鬱塞ヲ開ク也 卒中 或耳鳴 或ハ水腫ニヨシ

三月朔日

草□ フリヨウニヤ 根苦ク茂リテ家ノ如覆フモノ也 葉廣ク五カドニ切レテアルモノ也 毛アル也 葉ノ間ヨリ花ガサク也 小白花五出也 青キ實デ

キル也 後赤クナル也 根外白内黄

○能 外ノ葉ト合シテ用ユレハ下利サスルモノ也 散ニシテ一匁ヲ

用ユレハ殊ノ外水腫ヲ下スモノ也 腸胃ノ子バリヲトル也

○白犬ノ糞 間日アル熱病ヲ治ス 疝氣ニモヨシ

○鼠屎 ニガレムガラアコム 是ハ藥草ノニゲレコムノ能ナリ 誤ルベカラズ

兒ニ二厘ヨリ五厘迄 下賤者用之甚瀉劑ニ用ユ 小兒ニ用ユ 少シ用ユ 毒アル故多

用スヘカラス 小兒ノ濕ヲ下ス 兒腸胃間ノ惡物ヲ下スモノ也

○鶏卵 白ハ冷ナリ 眼病ニ用ユ 黄ハ湿ナリ

○妓婆三禮草 ウエイデレドラス ヒリクヲ 本名 葉ヨク下利ヲ調 散トシテ 三五歩計用 凡胸膈ノ類

板野 俊文、田中 健二——合田強の『紅毛醫言 卷二』の解題と翻刻

痛ヲヨク治ス 石淋ニヨシ

○一云 呼吸短息咳嗽肺病脾病腫氣便血瘀血大腸中ニアルヲ下ス也

沙石ニテモ通スル也 此時ハ他藥ニツレテ効ヲナスナリ。脚膝痛ニヨキ也

蘭子船中常説 一銅器若遇烈風 臨絶體絶命時 定心願應 吾産投十金 或五百金 於銅器中施人 云々

四月六日凶

全蝎 即蛇虫
和名サソリ

吉雄高及筆



まとめと考察

卷二の概要をキーワードで示すと以下になる。

- 一 狂(マニヤ)
- 二 卒中風
- 三 傷寒(ヘブリス)
- 四 小児積気
- 五 咳嗽
- 六 咳血
- 七 宿食
- 八 中風(パラレイシス)
- 九 水腫(後にも出る)
- 十 虫
- 十一 積気
- 十二 疫(ベステス)
- 十三 癩(ベデル ヒンギ)
- 十四 小便秘
- 十五 黄疸(ゲエル シュリト)
- 十六 翻胃 膈噎嘔吐
- 十七 嘔雜
- 十八 嘔吐
- 十九 吐血(ブルウト ブラアカ)
- 二十 水腫(ヘイドロビククス)

卷二では、このように、多くの病気について記載があり、合田強が、最新の医学知識を学んだことを示している。特に治術の部分の記載が多いことは特徴で、将来の治療に応用しようと考えていたのであろう。

次に卷一⁽¹⁾でも指摘していたが、内科を中心とした記載が多いことも特徴である。当時、吉雄流は外科で有名であったが、吉雄耕牛は自ら阿蘭陀語の内科の教科書を研究し、多くの知識を持っていたと思われる。さらに、この時期、外科はむしろ弟の吉雄蘆風にまかせ、自身は内科に専念していた。合田強にも弟がおり、合田大介(蘭齋)は外科を専門にしていたことと考え合わせれば興味深い。因みに合田強は吉雄耕牛の一歳年長の享保八年生まれで、前野蘭化と同年代である。蘆風は享保十年の生まれで、大介は強より十五才若い元文三年生である。

参考文献および注釈

(1) 富士川游『温恭合田求吾先生』中外医事新報 一二三九号 一〜九ページ
一九三六年(昭和十一)。

右の文献から略歴をまとめた。讃岐国豊田郡和田浜生まれ(現香川県観音寺市)。父は合田伝右衛門吉盤。弟は合田大介(蘭齋)。名は強、字は千之、通称求吾、温恭、号は巨鼈、鼈山。幼少の時、合田又玄、高橋柳哲について医を修め、宝暦二年(一七五二)二月京にて松原一閑齋に医と儒を学んだ。宝暦六年(一七五六)江戸にて望月三英につき、山脇東洋による『外台秘要方』の開板の校正に携わった。その後、長崎にて吉雄耕牛・吉雄蘆風に学んだ後、宝暦十二年(一七六二)一月長崎より讃岐へ帰る途中の南肥後で永富独嘯庵・亀井南冥に出会い、二人に長崎に遊学を勧める。墓は香川県観音寺市豊浜町和田浜。

(2) 片桐一男『江戸の蘭方医学事始 阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門 耕牛』丸善ライブラリー 二〇〇〇年(平成十二) 二三一〜二四〇頁

右文献から略歴をまとめた。

享保九年(一七二四)生 長崎 寛政十二年(一八〇〇)死 長崎

江戸時代中期の蘭方医。吉雄流外科の開祖。初め定次郎、次いで幸左衛門、のちに幸作、幸載と称す。諱は永章、号が耕牛、養浩斎、成秀館ともいう。長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ、少年時代からオランダ商館に入入りして、寛保二年（一七四二）、一九歳で小通詞、寛延一年（一七四八）には大通詞となった。

- (3) 長与健夫『合田求吾の『紅毛医言』について』日本医史学雑誌 三十八巻 三号 八九〜一〇〇頁 一九九二年（平成四）
- (4) 板野俊文、田中健二 合田強の『紅毛醫言』の現代語訳 医譚 通巻一九号 一〇二〜一三三頁 二〇一五年（平成二七）
- (5) 板野俊文、田中健二 合田強の『西洋医述 卷三』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十二巻 一号 九二〜九五頁 二〇一六年（平成二八）
- (6) 板野俊文、田中健二 合田強の『西洋医述 卷四』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十三巻 一号 一四六〜一三三頁 二〇一七年（平成二九）
- (7) 板野俊文、田中健二 合田強の『西洋医述 五』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十三巻 三号 三六〇〜三五二頁 二〇一七年（平成二九）
- (8) 華佗の麻沸散のことをいっていると思われる。阿蘭陀は近となっているが、下をみれば法近であろう。ホウキンという阿蘭陀人が、散腫薬を使ったと思われる。後の華岡青洲や、シーボルトと土生阮籍の関連を考えれば興味深い。
- (9) 洋学辞典 日蘭学会編集 雄松堂出版 一九八四年（昭和五九） 七三六頁

吉雄作次郎（永純）

享保十年（一七二五）生 安永六年（一七七七）死亡 五十三歳

江戸中期の阿蘭陀通詞。諱は永純（号は蘆風）。阿蘭陀通詞吉雄藤三郎の子で幸左衛門の弟。別家をたてる。寛保二年（一七四二）稽古通詞、宝暦八年（一七五八）小通詞末席、明和三年（一七六六）小通詞並、同八年小通詞助役となる。安永六年十月四日歿。五十三歳。明和八年九月に「由緒書」を提出している。子は左七郎。（片桐一男）

- (10) 長与健夫 『紅毛医術聞書』にみる合田大介のキャンケル論』日本医史学雑誌 四十一巻 第三号 三九五〜四〇二頁 一九九五年（平成七）
- 右文献から合田大介の略歴をまとめた。

合田大介

元文三年（一七三三）生まれる 兄より十五才年下

寛政七年（一七九五）三月 死亡 五十八才

宝暦五年（一七五五）十八才 長崎遊学 二年間滞在

その後四、五度 長崎遊学

宝暦十一年（一七六一）帰郷 二十四才 すぐに京都二代目松原一閑斎の元で二年間修業。

- (11) 板野俊文、田中健二 合田強の『紅毛醫言 卷一』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十三巻 四号 五二八〜五四四頁 二〇一七年（平成二九）